

ニセコのミライを、彩る仕事

～多様な人々が暮らすまちで、住民の暮らしを色鮮やかに
人とかわる、地域を支える、未来を考える

北海道ニセコ町は、5,000 人規模という小さな自治体では珍しく、人口が微増し、今後も人口維持が見込まれています。世界的にはパウダースノーが有名で、インバウンド経済の象徴のようなリゾート地としてメディアでは取り上げられることが多い一方、住民自治と情報公開のまち、持続可能な農業を大切にしている農村です。

そんなニセコ町では、近年、SDGs 未来都市として「環境を生かし、資源、経済が循環する自治のまち」を目指しています。同様に、多様性を重視しているニセコ町では、町役場においても社会人経験者採用や民間企業からの出向など、多様で幅広い視点を取り入れた行政組織を形作っています。

今回は民間企業から転職しニセコ町役場で活躍する総務課総務係の A さん、地域おこし協力隊を経てニセコ町職員に採用された教育委員会こども未来課こども未来係の B さんに役場の仕事や、ニセコ町の魅力などについてお話を伺いました。

本日のインタビューでお話を伺った方

A さん

江別市出身。2024 年に入庁し、総務課総務係に在籍。職員の働きやすい環境を維持改善するための業務を担当。前職は建設専門誌の記者。以前より記者として役場に取材することが多かったことからニセコ町を身近に感じており、地域に密接な職務内容に興味を持っていたところ、結婚を機にニセコ町へ。

B さん

愛知県出身。2 年間ニセコ町で地域おこし協力隊を経て、2024 年に入庁。協力隊時代は、サステナビリティ関連の仕事をしたいという思いから商工観光課に配属され、入庁 1 年目も同課勤務。2 年目からは教育委員会こども未来課こども未来係（主任）に在籍。10 年前に観光客としてニセコ町に訪問した際、自然の美しさに魅了され、いつか住んでみたいと思っていた。自然と触れ合ううちに、自分もその自然を守りたいという気持ちが強くなり、ニセコ町の環境への取り組みに共感してニセコ町の協力隊に応募。

ニセコってどんなまち？

—お二人がニセコ町に来る前に感じていた期待と、実際に住んでみてのギャップはありましたか？

Aさん

幼少期にニセコに来たことがあって、観光ではアクティビティが楽しいイメージがありましたが、最近はインバウンド向けの「開発」というイメージが強かったです。でも、実際に来てみると良い意味で「田舎」でした（笑）。少し恐れていた海外の方も日本人と馴染んでいて違和感がなく、隔たりがないことがギャップですね。自分の住まいの周りにも移住者が多いですが、ニセコ町に馴染んでいるだけでなく、先頭を切ってニセコ町を盛り上げているような方が多くて驚いています。

Bさん

私の場合、もともと観光として冬しか来た事がなかったのですが、来てみたら1年を通して自然や景色が素晴らしいと感じました。地域の人柄もとても良く、農村らしい人の温かさを感じて感動しています。想像していなかったことは、自主的に地域を良くしようと動いている方が大勢いて活気があることで、良い意味でのギャップを感じました。そして、除雪の大変さは想像以上でした…（笑）

—働く前の想像と実際に役場で働いてみての感想は？

Aさん

役場内はとてもフランクで会話が多く、ハツラツとして意見も言いやすいです。町長や上司とも隔たりがなく、雰囲気の良いことに、想定していた考えとのギャップを感じています。前職が記者だったので、広報係などに配属されるのかと思っていましたが、総務に配属されたのは意外でした。これまで経験のない、未知の仕事だったので楽しめています。



Bさん

私の感想も似ていて、役場のイメージはもっと固く閉鎖的なものだと思っていましたが、想像以上に職員間で話やすく、挑戦する気持ちを後押ししてくれるような開放的な職場だと感じました。

ー観光地であり、多様な人が暮らす、ニセコ特有の対応に苦労した点はありますか？

Bさん

日本語が話せない子どもの対応は皆苦労していますが、全ての子どもが教育をしっかり受けられるようにしてあげたいという思いがあります。私は英語が話せますが、いつも幼児センターにいるわけではなくて、保護者との面談や困りごとなど呼ばれたら行くというスタイルなので…。幼児センターでは、各学年10～20%は外国籍を持つ子がいるイメージで、現場は苦労が多いと思います。

Aさん

私は、役場への電話で外国語しか話せない方からの対応が難しいと感じています。今はほとんど CIR（ニセコ町役場国際交流員）が対応していますが、自分もできればいいのにというもどかしさがあります。また、役場内ではニセコ町生まれニセコ町育ちの職員が少ない印象で、役場職員も移住者が多いため、地元のことや歴史的な経緯をくまなく知っている地元出身の職員が貴重な存在となっているのはニセコ町特有だと感じます。

CIR（ニセコ町役場国際交流員）とは？

外国人居住者や旅行者が多いニセコ地域において、多文化共生や国際理解を推進するため、町に雇用されている外国人スタッフです。彼らは、役場の国際交流・日本語支援窓口などで、通訳・翻訳、外国人住民の生活支援、情報発信を行っています。ニセコ町では現在、インドネシア、ベルギー、ドイツ、中国、カナダ出身の6人の国際交流員が勤務しています。

ひとつの仕事がまちの色になる - 役場の仕事

ー業務の中で、自分で判断・提案する場面はどのくらいありますか？

Bさん

商工観光課の時には、自分でやりたいことをどんどん提案して実行するというスタイルで働いていたように思いますが、こども未来課では補助金の申請など事務処理の時間が多く、前ほどその機会はないように感じます。ただ、自分がやりたいという案件があれば、後押ししてくれるような環境は整っています。配属先によって、自ら提案する場面のふり幅はあるように感じますね。



Aさん

自分が進めたい案件があれば、どんどんやっていいという雰囲気がありますし、挑戦したいことがあれば、それをしやすい環境にあると思います。

ー仕事を任されたなど、やりがいを感じたエピソードはありますか？

Aさん

総務課なので職員から細かく「ありがとう」をもらえる機会が多く、やりがいにつながっています。福利厚生の実施や案内を出す際も、職員の業務の妨げにならないようぱっと理解でき、利用しやすいものにしようと試行錯誤しています。やりがいのエピソードでは、これまで女性健診の対象病院が男性医師しかいませんでしたが、新しくできた女性医師の病院を推薦したところ、発案が通り、対象病院が増えたことに職員から感謝をもらえたとき、やりがいを感じました。

Bさん

英語支援は、とくに任されていると感じます。幼児センターでの保護者面談に通訳として入った際には、親御さんのほっとした笑顔や先生方の安心した様子を見ると任されたと感じるし、やりがいも感じます。



写真：ニセコ町役場からお隣のニセコ小学校を望む。道内の小規模な農村では珍しく、ニセコには数多くの子どもがいて、習い事やスポーツなどの機会も豊富に提供されている

ー責任の重さを感じる場面はありますか？

Bさん

良いものを提供したいという思いがあるので、一つ一つに丁寧に取り組みたいと思っていますが、限られた業務時間の範囲では足りないと感じる場面があります。

Aさん

私は、職員の日常業務を少しでも楽になるように改善したいと思っています。そのため、楽になると思って何か新しいツールを入れることが考えられますが、新しいものを入れるとそれに慣れるのに時間がかかるのでハレーションも大きいです。日々の業務が楽になれば、その分町民の方に割ける時間も増えるので、より良くしたいという思いが強い分、責任を感じています。

—ニセコ町役場に向いている人はどんな人だと思いますか？

Aさん

素直で挨拶ができて元気な方は、職場からも地域からも愛されると思います。自然が好きな方であれば、住んでいてより楽しいと思いますし。自分が話せなくても、相手が話しやすいと感じたり、人の変化に気づけたりする人は向いていると思います。

Bさん

ヒアリング能力があるといいと思います。町民の困りごとを聞けたり、人と人を繋げたりできるような人が向いていると思います。人とのコミュニケーションが取れて、話しやすい人柄が良いと思います。



写真：日本でも最高性能の断熱と省エネを誇る、冬でも暖かい職場環境「ニセコ町役場庁舎」

—どんな想いをを持った人に来てほしいですか？

Bさん

これまでニセコ町を作ってきた人たちの思いや伝統を大切にしていきたいという想いを持っている人に来てほしいと思います。

Aさん

ニセコを好きになってくれるような、溶け込んでくれるような人。自分の価値観を良い意味で崩せるような、柔軟に吸収できるような人に来てほしいと思います。



—未来の世代に対する期待や想いを教えてください。

Bさん

ニセコ町の良さを未来に繋げて行ってほしいと思います。

Aさん

美しい景観や自然がニセコ町の良さの根底にあると思いますが、それは羊蹄山が美しいだけではなく、周りにある田畑や商店、飲食店など地域住民の営みを含めて美しいと思うので、それらを理解した上で全部を大切にしていってほしいという期待を持っていますし、自分もそうありたいと思います。